

## 「共に生きる」ということ

田中公明 (社会福祉法人共働学舎常務理事)

社会福祉法人共働学舎は、田中公明さんが中心となりキリスト教精神にそって障害者の通所授産施設を開設したことから始まっています。東京 Y W C A は今年度の基本方針に「環境保全のために持続可能な社会を目指す」「個人の尊厳を重んじ、支え合う社会を目指す」を置いています。共働学舎の取り組みに学び、私たちが活動していく上での一助にしたいと思います。

共働学舎では、1980 年に無認可で作業所を始めた時から、リサイクルに関わる作業を行ってきました。初めにやりだした作業は、古紙の回収です。当時は、「チリ紙交換」という言葉が一番ポピュラーでした。最も効率よく回れる方法を考えた結果、知己のあった国会議員、故片山甚市さんをお願いし、国会の議員会館の部屋を一軒一軒訪ね、ありとあらゆる紙を回収して回りました。

廃品を扱ってきたのは、「回収」という作業が単純で、障害者でも参加しやすい上、お金になったからです。紙の他にも、レントゲン廃液、パソコンの基盤、レントゲンフィルム、廃食油、空き缶や空き瓶、ペットボトルなど、幅広い廃品を扱ってきました。これらの収入はどれも、その時の市場に大きく左右され、収入源としては不安定です。

国会を初め、地域でもずっと続けてきた紙の回収も、「やめようか」と話し合った時が再々ありました。その時、共働学舎を利用する、障害を持つ仲間が言ったのです。「俺ら、社会で『役にたたない』とされる人間が、『役にたたないモノ』を、『役にたつモノ』に変える。それこそ、意味のあることだと思う」と。

そこで私たちは知恵を絞り、リサイクルできない「雑古紙」から、二度とリサイクルしないトイレット・ペーパーを作る、ということを目指しました。それから私たちは1年かけて、値段のつかなくなった雑古紙を持って、日本全国の製紙工場を回りました。あちこちの大規模な製紙工場で門前払いされる中、私たちの思いに賛同し、ともに苦勞して雑古紙 100 パーセントのトイレット・ペーパーを開発してくれたのは、「日本一小さな」製紙工場でした。

今、世の中には、「リサイクル」という、便利な言葉が普及しています。エコも、リサイクルも、もとをただせばもったいない、という精神です。自然界にあるひと、もの、すべてを大切にすること。その価値を見出せるかどうかは、一人ひとりの勝負です。共働学舎では、そういう価値観を大切に、雨水や、太陽の光、身の回りの自然も最大限に利用しています。

共働学舎のある小野路という地区は、貧しかった時代に現金収入を得るべく、竹を植え、タケノコを生産してきました。今では雑木林を侵食して「竹害」扱いされている竹を間引きして、粉碎し、土に撒くと、竹の含む乳酸菌で土が元気になり、畑では防草の役目も果たします。身近な自然が味方につくと、とても楽しく、おおらかな気持ちになります。

そうはいつでも、夏は暑く、竹やぶはやぶ蚊でいっぱいです。共働学舎の障害者に、一緒に作業しよう、と声をかけても、ちっとものってこない日も多々あります。こちらの思い通りにはいかない自然、そして、人間。だから、面白いのです。

それこそが、共に生きる、ということなのだと思います。